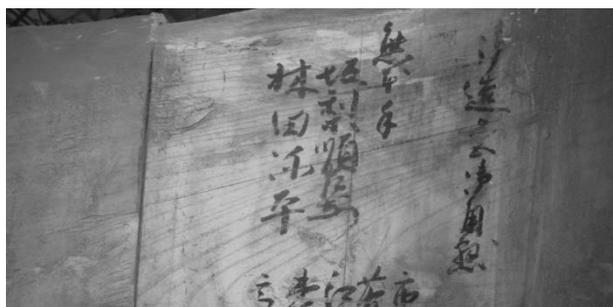


1. 気になる役職名

北面の懸魚には、右側と左上に楼門造営期間の節目となる年月日と棟梁水民元吉の情報が書かれ、左下に大工さんの名前と出身地が書かれています。そして、中央付近右には、2名の造営関係者の名前と役職が書かれています。1人は今村撰津という人物で、阿蘇神社の神職さんであり、阿蘇神社造営における神社側の中心人物の1人です。もう1人が今回のコラムで取り上げる坂梨順左衛門という人物で、阿蘇神社造営のいわばプロデューサーである「御造営御用懸」という役に就いていた方々の1人です。

しかし、懸魚に書かれた墨書の写真を見てわかるとおり、そこには「御造営御用懸」という肩書ではなく、「河江手永御惣庄屋」という肩書で書かれています。なぜこの肩書で書かれたのか、考えてみたいと思います。



御造営御用懸
熊本手
坂梨順左衛門
林田弥平



市原弥一郎
菅儀八郎
江藤傳右衛門
森清五郎
高木仲五郎
小頭
仙助

楼門 下層化粧隅木(北東隅)北面

この墨書では、坂梨順左衛門の肩書は御造営御用懸です。

2. 手永と惣庄屋

まず、「河江手永御惣庄屋」という肩書についてみていきます。

「手永(てなが)」とは、阿蘇を含む肥後国の大部分を支配していた細川藩が定めていた行政区域のことで、郡をいくつかに区分し、いくつかの町・村の集合体としていたものでした。例えば、阿蘇郡は7～8つの手永に分けられ、そのうちの1つであり阿蘇神社の所在する坂梨手永(さかなしてなが、旧一の宮町とほぼ同じ区域)には20ほどの町・村がありました。そして、手永の長が「惣庄屋」という名前の役職でした。

つまり、「河江手永御惣庄屋」という肩書は、坂梨順左衛門が河江手永(ごうのえてなが)の長だったという意味になります。河江手永は現在の宇城市小川町河江を中心とする行政区域でした。そして、阿蘇神社造営の棟梁水民元吉の出身地である小川町も河江手永です。この共通点あたりに手掛かりがありそうです。

3. 坂梨順左衛門の経歴

次に、坂梨順左衛門の経歴をみていきます。

順左衛門は坂梨善兵衛という人物の養子でした。文政5年（1822）、善兵衛が内牧手永（うちのまきてなが、旧阿蘇町とほぼ同じ区域）の惣庄屋在職中に亡くなったことで、順左衛門が跡を継ぎ内牧手永の惣庄屋になります。

惣庄屋は、はじめの頃は同じ手永の惣庄屋を同じ一族が継いでいく世襲制でしたが、途中から郡を越えての配置替えも見られるようになります。そのため、惣庄屋の方々は現在の言い方で言うと転勤族でした。順左衛門も配置替えにより、文政10年（1827）に河江手永惣庄屋、天保8年（1837）に五町手永（ごちょうてなが、現在の熊本市の一部区域）惣庄屋になります。その後、天保9年（1838）から干拓などによる新地築造の責任者に任命され、天保11年（1840）に御郡横目という役に就きます。そして、弘化4年（1847）に阿蘇神社の御造営御用懸に任命されました。

経歴をみていくと、坂梨順左衛門は文政10年から天保8年の10年間ほど、河江手永惣庄屋であったことがわかりました。しかし、なぜ懸魚には過去の肩書が書かれていたのでしょうか。楼門懸魚の墨書は、内容的に水民元吉が嘉永2年（1849）に書いたものと思われます（もしくは、水民元吉が考えた内容を別の大工さんが墨書きした可能性も考えられます）。そうであるならば、水民元吉があえて過去の肩書で書いたこととなります。ここから推測すると、少なくとも水民元吉は河江手永惣庄屋時代の坂梨順左衛門を知っていて、接点があった可能性もあるのではないかと考えられます。

次に、その接点の可能性について考えてみたいと思います。

4. 坂梨順左衛門と水民元吉の接点の可能性

坂梨順左衛門が河江手永惣庄屋であった文政10年から天保8年の間は、水民元吉は何をしていた時期なのでしょう。

水民元吉は18～19歳のとき河江手永内の豊福社という神社（現在の豊福阿蘇神社）を造営したと言われていています。水民元吉の年齢から逆算するとこれは天保3～4年（1832～1833）のことであり、坂梨順左衛門の河江手永惣庄屋時代です。ともすると、豊福社造営完了の際に惣庄屋である坂梨順左衛門から褒賞をいただく機会があったのかもしれない。

さらに想像を膨らませると、水民元吉を阿蘇神社造営棟梁に推薦したのも、実は坂梨順左衛門だったのではという可能性も考えられます。水民元吉は懸魚の墨書を書いた直後に細川藩の御用大工として召し抱えられるのですが、自分がそこまで上り詰めることができたのは、はじめに豊福社造営によって坂梨順左衛門に認められたからだと考えたなら、そのはじめのことを思い出し、あのような肩書の書き方をしたのでは、という想像もできます。

真実はわかりませんが、水民元吉にとつ



豊福阿蘇神社

て河江手永惣庄屋時代の坂梨順左衛門は、何か思い出深い人物であり、あえてその時代の肩書を書きたくなかったのかもしれませんが。

以上、楼門懸魚に名前の書かれている坂梨順左衛門とその肩書についてみてきました。坂梨順左衛門が阿蘇神社の御造営御用懸に就任したのは、楼門の造営が困難を極めていた時期であり、その時期に就任したということは、坂梨順左衛門は建設事業について非常に詳しく知っていた人物であったと思われます。また、内牧手永惣庄屋であった時期もあり、地の利を生かして阿蘇神社造営に関わることのできる坂梨順左衛門だからこそ、御造営御用懸に任命されたとも推測されます。阿蘇神社は、棟梁水民元吉含め河江手永とその近辺の大工さんが何人も参加して造営されました。また、阿蘇の内牧手永の大工さんも多数参加しています。阿蘇と河江周辺の人々を繋いだのは、実は坂梨順左衛門だったのかもしれませんが。

今回紹介した楼門懸魚は、熊本市内にある肥後の里山ギャラリーにて9月30日より開催の展覧会「復興のシンボル 熊本城・阿蘇神社」に出展されており、実物をご覧ください。この機会に是非ご覧になっていただけたら幸いです。会期は令和元年(2019)11月16日(土)までです。



一ノ御殿御小屋入
天保拾年亥三月八日
棟梁水民元吉今歳式拾五才
二ノ御殿御小屋入
天保十一年子八月
諸神社御小屋入
天保拾参 寅十一月三日
楼門御小屋入
天保拾四卯六月廿八日
棟梁水民元吉今歳三拾才
楼門御上棟嘉永二年閏四月五日
手附大工
松山手永
大見村 藤七 内牧 常太
宮地 兵四郎 同 藤四郎
小川 松次郎 同 壽太郎
(地) 同 又市 内牧 廣蔵
宮口 重太郎 同 久四郎 井手村 壽七
小川 三平 同

山シ棟梁和七
鶴崎

楼門 上層妻飾 南面懸魚

ちなみに、楼門懸魚は南北面ともこういう輪郭をしており、南面懸魚にはこのような内容が墨書されています。

- 参考文献 『阿蘇神社建造物調査報告書』阿蘇市教育委員会・宗教法人阿蘇神社、2006
花岡興輝『近世大名の領国支配の構造』国書刊行会、1976
『資料阿蘇 第二集』第一法規出版、1980
『一の宮町史 自然と文化阿蘇選書①～⑩』一の宮町、1997～2001
『波野村史』波野村、1998
『阿蘇町史』阿蘇町、2004

(石田 陽是)